

# イベント参加による学生の環境配慮意識・行動の変化 —京都学生祭典実行委員に対する聞き取り調査結果—

白 澤 ちあき\*, 松 原 斎 樹\*\*

Change of the environment-conscious attitude and behavior of students by participating the events  
Results of the interview survey to the Kyoto student festival execution commissioners

Chiaki SHIRASAWA\*, Naoki MATSUBARA\*\*

**要 旨：**住まいの温暖化対策としては、建物の断熱気密化などのハードウェア対策に加えて、意識や住まい方に働きかけるソフトウェア対策が必要である。本研究では、京都学生祭典実行委員会の活動に着目して、環境問題に対する関心があまり高い人々も含めて、祭典に参加することによって環境配慮意識・行動の変化の様子を明らかにすることを目的としており、今回は環境に関する部署の実行委員と一般参加者を対象とした聞き取り調査の結果を報告する。一般参加者も祭典の前後で環境配慮意識・行動の変化が認められるが、環境に関する部署の実行委員の場合は、特に大きく変化していることがわかった。彼らも最初から高い環境意識を持っていたわけではなく、最初は興味本位あるいは友人が欲しいと言う理由で祭典実行委員を始めた学生が多いが、一般参加者と比較すると祭典後の環境配慮意識・行動の変化は顕著であると言える。

(2015 年 10 月 1 日受理)

## 1. はじめに

地球温暖化など地球レベルでの環境問題が深刻化しており、豪雨、台風の強大化等との関連が危惧されている。2014 年には、IPCC 第 5 次報告書が発表され、人類の人為的な活動が温暖化の主要な原因であることや、現状のまま推移すると地球の平均気温が今世紀末には 1986 年～2005 年の平均よりも 4.8℃ 上昇すると予測されることなどが指摘された<sup>1)</sup>。地球温暖化対策として、従前から環境省や経済産業省など政府機関からは省エネルギーの要請がなされている。加えて、東日本大震災に伴う深刻な原発事故によるエネルギー不足の問題があり、省エネルギーは社会的に大きな課題になっている。

住宅・建築物分野では家庭部門のエネルギー起源二酸化炭素の排出量削減を進めて新たな削減目標を達成するため、大規模な建築物の省エネ措置が著しく不十分である場合の命令の導入や一定の中小規模の建築物について、

省エネ措置の届出等の義務付けを柱とする「エネルギーの使用の合理化に関する法律の一部を改正する法律」(平成 20 年法律第 47 号) が 2008 年 5 月に成立した<sup>2)</sup>。その後 2013 年には住宅の省エネルギー基準が改正され、対策が強化されつつある。しかし日本における現存する総住宅戸数に対する新築住宅戸数の割合は 2% にも満たない数字であり、新築住宅の断熱・気密化というハードウェアの省エネルギー対策だけでは、全住宅の対策が完了するまでには、最低でも数十年を要することになる。従って、省エネルギー対策を進めるためには、ハードウェア対策に加えて、居住者の住まい方に関するソフトウェア対策も重要である。ソフトウェア対策に関連する研究としては、例えば、住宅における暖冷房、給湯、照明などの省エネルギーを対象とした住まい方とエネルギー消費量に関する研究が進められている<sup>3)</sup>。暖冷房の消費エネルギー削減に関連する研究課題としては、防暑行為の実施状況<sup>4)</sup>、<sup>5)</sup>、<sup>6)</sup> や、採暖的な暖房行為の実態<sup>7)</sup>、窓開放

\* 株式会社ニトリ

\*\* 京都府立大学大学院生命環境科学研究科

の実態<sup>8)</sup>などに関する調査研究も行われている。さらに、視覚や聴覚を刺激する環境要因による寒暑の不快さを緩和することに注目した研究もある<sup>9), 10), 11)</sup>。

省エネルギーとは、本来は、生活水準を下げることなく、エネルギーの使用効率を向上させて消費量を減らす、という意味であるが、暮らし方による省エネルギーは、不快さをがまんするというイメージでとらえられる傾向がある。従って、環境に配慮した行動には、自己犠牲のイメージがもたれることが多いと言えよう。環境配慮的な意識や行動に関する研究も、様々な観点から行われている。環境配慮行動の規定因に関する社会心理学的な研究には、広瀬<sup>12)</sup>、三阪<sup>13)</sup>、小池ら<sup>14)</sup>などがある。

住民の環境意識については行政による一般住民を対象とした意識調査が実施されている。環境省<sup>15)</sup>は、一般住民の環境に対する危機感や意識は総じて高く、環境に配慮した行動をとうとうとする消費者も増えていると報告している。しかし、リサイクルや省エネルギーの事例において、住民の意識と行動の間の不一致が見られるとの報告が少なくない<sup>16)</sup>。このような背景の中で、いかに意識を啓発して行動を促すか、は非常に大きな課題となっている。環境意識啓発の手法として鈴木ら<sup>17)</sup>は環境配慮行動習慣の形成には実践的ネットワーク・集団的に取り組む体制づくり・取り組みの可視化が有効であり、これらをふまえた環境教育の重要性を示した。環境教育と環境配慮行動実施の関連性についての研究は少なくない<sup>18)</sup>。しかし大橋ら<sup>19)</sup>は環境教育を受けた人は認知的不協和が起こらないように環境配慮行動を行っている可能性を示唆している。環境配慮意識啓発だけでなく、環境教育以外でも環境配慮行動を促進させる要因を探ることは極めて重要である。

松原と後藤<sup>20)</sup>は、20代若者の環境配慮意識・行動が低い事実や、日常生活における「もったいない」意識は食べ物や資源・エネルギー消費に関する項目で高いこと、環境意識・行動が家庭内の生活慣習と関係があること、などを明らかにした。また、松原<sup>21)</sup>は「もったいない」意識は親が子より高いこと、行動類型は親が「低」の場合、子も「低」が多いこと、親の行動・しつけは子に影響を与え、省資源・省エネルギー的な生活を進展させる鍵は男性の子と男親の行動であること、などを明らかにしている。さらに、10代若者の行動を高めるには、親自身が自らの行動で示すとともに、学校での授業、とりわけ体験学習を通じて、具体的実践的な暮らし方を教授することが重要であることを指摘した<sup>22)</sup>。

環境配慮意識にあたえる影響は、メディア情報が79.9-87.1%，しつけ教育45.6-57.7%，「学校での授業」29.6-42.9%，エコイベント13-18%，などである<sup>20)</sup>。イベントの一つにお祭りがあり、地域振興の手段としても各種の祭典が盛んに行われており、この場を環境配慮意識の啓発に活用できれば、非常に意義が大きいと言える。地域のイベントやお祭りでの住民参加型のゴミ減量など

の環境配慮に関する研究も行われている。2003年から行われている「打ち水大作戦」では実測調査と体感アンケート調査によって打ち水による温熱環境緩和効果を明らかにしている<sup>23)</sup>。小山ら<sup>24)</sup>は打ち水実施により参加者の環境意識を啓発できることを示した。大石<sup>25)</sup>はゴミ減量のお祭りに参加した人は日常生活における環境配慮行動を多くとることを示した。これらの研究はイベントによる環境意識の啓発について述べているが、イベント実施前後での意識・行動の変化に関する研究は少ない。またイベントやお祭りが開催されている現地で、参加者を対象に調査するものがほとんどであるので、環境配慮意識・行動があまり高くない人の意識や行動のデータは少ない。

以上より環境配慮意識・行動に関する研究は多いが、イベントに参加することによって環境配慮意識・行動に生じる変化を社会実験的に調査した研究は少なく、また環境意識・行動があまり高くない人を含む多くの人々を対象とした、意識・行動の変化に関する調査もあまりみられない。そこで、一見環境負荷を増やすイベントと思われる学生祭典に着目して、ストイックな意識に訴えるのではなく、楽しみながら環境配慮意識・行動を普及する可能性を探ることは有意義であろう。

本研究では、京都学生祭典実行委員会の活動<sup>注1)</sup>に着目して、環境問題に対する関心があまり高くない人々も含めて、祭典に参加することによって環境配慮意識・行動の変化の様子を明らかにすることを目的としている。すでに、アンケート調査結果から、当初環境配慮意識の高くなかった学生も活動に参加することで環境配慮意識の向上と行動が促進されることを報告している<sup>26)</sup>が、今回は、実行委員の聞き取り調査からえられた回答を具体的に考察することを目的としている。

## 2. 方法

本研究では2011年の第9回京都学生祭典の企画のうち、KYO-SENSE事業（以下KSP事業）の取り組みに着目する。KSP事業とは祭典来場者の増加に伴う環境負荷増大を反省した学生達が2008年の第6回京都学生祭典から発足させたエコ企画である。今回の調査研究では、祭典前後のWeb調査、打ち水当日質問紙調査、ヒアリング調査の3種類の調査を行った。回答者はKSP事業の運営実行委員「KSP実委」とKSP事業以外の実行委員「KSP以外実委」と実行委員以外の踊り手・担ぎ手等の参加者「一般」の3つの「所属」に分類した。京都学生祭典本祭終了後、2011年11月21日から12月9日の間でKYO-SENSEプロジェクトの実行委員に対してヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査では「KSP実委」と「一般」の参加者を対象とした。質問項目は1. 実行委員をやろうと思ったきっかけ・祭典に参加しての感想、2.KYO-SENSEに関する感想・意見、3. 環境意識・

価値観評価等である。

### 3. 結果と考察

ここでは祭典終了後に実施したヒアリング調査について、項目ごとに概観する。なお KSP 実委と一般参加者に対して行ったヒアリングの項目は同一ではない。

#### 3.1 KSP 実委へのヒアリング

本節では KSP 実委を対象として行ったヒアリング結果について述べる。

##### 3.1 (1) 調査対象者属性

表 1 に調査対象者の属性を示す。便宜的に回答者名をアルファベットで表記する。

##### 3.1 (2) 実行委員をやると思ったきっかけ

実行委員をはじめたきっかけは「友人に誘われたから」が 2 名、「他大学の友達が欲しかったから」が 3 名、「ポスターや広告を見て興味をもった」が 3 名であった。また京都に下宿を始めたということで「京都らしいことをやってみたかった」、「京都でしか出来ないことだから興味があった」という回答が見られた。実行委員をはじめた時期は 2011 年 4 月から 6 月である。KSP を希望した理由としては「地域の人と交流できると聞いたから」「大変だと聞いていたので挑戦してみたかったから」「インターンに参加した企業に KSP 出身の先輩がいたから」などの意見のほかは「なんとなく面白そうだったから」というものであった。また、学生祭典が京都市のエコイベントとして高く評価されていることを知っていたかを尋ねると、全員が「知らなかった」と回答した。

##### 3.1 (3) KSP 活動の価値観

KSP 活動に対する価値観では回答内容に 3 つの特徴があった。

一つは「祭典中のゴミ問題を解決することが KSP 活

動のやりがいだ」という意見である。具体的には「ゴミが出る以上、地域の人に祭典を辞めろと言われても仕方がない。自分たちの努力が祭典を存続させていると思うと辛い仕事も頑張れる」、「楽しい祭典の場でゴミ問題は深刻。責任をもってやることなのでやりがいがある」などである。二つめは「京都らしい活動を通して地域との交流促進が出来る」という意見である。具体的には「打ち水やクリーンアップなど地域の人と繋がれるのが嬉しい」、「地域交流が疎遠になった現代において、新しいコミュニケーションの形になり得る活動だと思う」、「今まで打ち水はやったことがなかったが、初めて話す地域の人とも仲良くなれて楽しかった」などの意見があった。

三つ目は「環境に対する考え方が変わった」というものである。具体的には「会議の場で周りの人は知っているのに自分は知らないということがたくさんあった。他部署に対して発信する立場なので、自分が思っている以上に知識がないことが分かってよかった」、「これまで環境について考えることが少なかったので、様々な環境問題についてメンバーと話して行動に移すことで達成感が得られた」、「テレビを見ていても環境問題やエコの特集をやっていると自然と見てしまうようになった」といった内容であった。また「自分自身を含めて参加者の環境配慮意識を変えるようなきっかけとなったと思う活動」について尋ねたところ、「当日のゴミ分別」が 3 名、「打ち水活動」が 2 名、「クリーンアップ活動」が 2 名、「特には思わない」が 2 名であった。「当日のゴミ分別」については「祭典当日、KSP 実委はゴミナビゲーターとしてゴミ分別を促進する立場であった。そのためゴミ分別の大切さを実感出来たし、分別に気付いてくれた来場者が多くいたように感じた」との意見であった。「打ち水活動」については「地域の人や外国の方の参加が多く積極的に参加してくれていた」、「地域の人と色々な話をする中で、打ち水の効果的なやり方や昔の話などを聞いて自分自身参加する意義を実感した」などの意見であった。「クリーンアップ活動」では「クリーンアップ活動に参加して道に落ちているゴミがすごく気になるように

表 1 調査対象者属性 (KSP 実行委員)

回答者	性別	居住地域	出身地	回生	打ち水参加有無			祭典参加経験	
					7 月 14 日	8 月 6 日	8 月 27 日	何回目か	参加形態
A	女性	京都市内	山梨県	2	—	○	○	1 回目	—
B	女性	京都市内	静岡県	1	—	○	○	1 回目	—
C	女性	京都市内	静岡県	2	—	—	—	1 回目	—
D	女性	京都市内	神奈川県	1	○	—	—	1 回目	—
E	男性	京都市内	兵庫県	2	○	—	—	1 回目	短期スタッフ
F	女性	大阪府	広島県	2	—	○	—	1 回目	—
G	男性	大阪府	大阪府	3	○	○	○	1 回目	—
H	女性	京都市内	京都府	2	—	○	○	1 回目	—

なった。地域ごとの特性も知れてよかった」,「クリーンアップ活動を実施した地域の人はもともとゴミ削減などの意識が高く、活動を通して教えていただくことがたくさんあった」などの意見であった。さらに「今後のKSP活動において課題だと思うこと」を尋ねると、回答には3つの特徴が見られた。まず1点目は「祭典実行委員全員への意識・行動啓発の徹底」である。具体的には「短期スタッフなど、KSPの活動がよく分かっている人が対応することがあり、来場者が困惑していた」,「祭典当日のゴミ分別など、店舗スタッフへの啓発を徹底する必要がある」という意見である。2点目は「運営時の注意点の引継ぎ」であった。具体的には「毎年メンバーが変わるので、一からのスタートになってしまって前年の反省が全く活かせず、同じ失敗をすることがよくあった」という内容であった。3点目は「更なる地域の交流」であった。具体的には「せっかく地域の人と交流するのに実施地域が少ない」,「地域の人たちとの交流・ふれあいの機会をもっと増やしたい」などであった。

### 3.1 (4) 環境配慮意識・行動の価値観

ここでは震災前・震災後・祭典終了後の3つの時期における意識・行動変化について質問した。

震災前の環境配慮意識・行動については「日頃から環境問題に関心があった」が1名,「地球温暖化など知識では知っていたが自分には関係があるように思えず特に何かしようと思ったことはなかった」,「誰かがやるだろうと他人事のように思っていた」など「特に何かをしようとは思っていなかった」という主旨が6名,「全く無意識だった」が2名であった。震災後の環境配慮意識・行動変化については「震災直後は家族で節電をしていたが、あまり長くは続かなかった」が1名,「でんき予報に目は通していたが、節電には結びつかなかった」が1名,「ボランティアで東北に行って被害を目の当たりにしたが、被災地の手が足りないことが分かっただけで節電や節水意識が芽生えたわけではなかった」が1名,「被害の大きさを実感して自分には何が出来るかと考えたこともあったが、関西は被害が少なかったこともあり実感が湧かず、行動に移せなかった」等が5名,「チェーンメールで情報が錯綜していて何が正しい情報かわからず、反感がつのった」が1名であった。祭典終了後の環境配慮意識・行動変化については「ゴミナビ経験で呼びかける

ことできちんと分別してくれる人が多く、自分も分別を続けようと思った」,「祭典を通して環境のことを少しは知ったので、エアコン使用を控えたり、節水したりするようになった」,「打ち水をして水の供給量が少なかったこともあって節水の意識が芽生えた。また洗い物をする際に油を拭き取るなど水に対する意識が強くなったように思う」,「マイボトル・マイ箸・マイバッグを持つようになった」,「リサイクルをするようになった」,「無駄なものを買わなくなった」,「コンセントを抜くなど節電に気を使うようになった」,「クリーンアップ活動を通して、道端に落ちているゴミを拾うようになった」などに見られるように、震災前と比較すると、環境配慮意識・行動は高まったと言える結果であった。また「学生祭典が環境配慮意識・行動を変えるきっかけになったか」という質問に対しては、全員が「きっかけとなった」と回答した。この点では、KYO-SENSEの活動を行った委員に関しては、祭典が環境配慮意識・行動を変える意味合いを持ったと言える。

### 3.2 一般参加者へのヒアリング

本節では一般参加者に対して行ったヒアリング結果について述べる。

#### 3.2 (1) 調査対象者属性

表2に調査対象者の属性を示す。便宜的に回答者名をアルファベットで表記する。

#### 3.2 (2) 祭典参加のきっかけ

学生祭典に参加したきっかけは全員が「学生祭典に出演することを目的とした踊りサークルに入っていたから」であった。今回ヒアリングした4名の回答者は皆、京都学生祭典の企画の一つである「京炎 そでふれ! 全国おどりコンテスト」に参加していた。また1回生のK以外の3名は昨年も学生祭典に参加していたので2年目の活動であった。

#### 3.2 (3) KSP 活動の熟知度

京都学生祭典のエコ評価認知については、回答者4名全員が「知らなかった」と回答していた。またKSP活動の存在も,「祭典当日のゴミナビゲーター」や「縁日のリユース食器利用推進活動」は「見たことがある」が

表2 回答者属性 (一般参加者)

回答者	性別	居住地域	出身地	回生	打ち水参加有無			祭典参加経験	
					7月14日	8月6日	8月27日	何回目か	参加形態
I	女性	京都市内	岐阜県	2	－	－	－	2回目	踊り手
J	女性	京都市内	宮城県	2	－	－	－	2回目	踊り手
K	女性	京都市内	京都府	1	－	－	－	1回目	踊り手
L	男性	滋賀県	滋賀県	2	－	－	－	2回目	踊り手



2名、「全く知らない」が2名、その他「クリーンアップ活動」や「打ち水活動」については4名全員が全く知らないとの回答であった。

### 3.2 (4) 環境配慮意識・行動の価値観

ここでは震災前・震災後・祭典終了後の3つの時期の意識・行動変化について質問した。震災前の環境配慮意識・行動についての回答は「環境問題について学校で講義があったのである程度関心があった」が1名、「言葉を聞いたことのある程度で意識して実践していることは特になかった」が3名であった。震災後の環境配慮意識・行動変化については「自分が宮城県出身なので、環境を意識してというよりも被災地のことを考えて節電・節水していた」が1名、「被災地が関西から離れていることもあって、特に行動したことはなかった」が3名であった。祭典終了後の環境配慮意識・行動変化については「祭典が終わって特別変化したと実感することはない。でも自分が続けられることは続けていきたいと思う」が1名、「今日のヒアリング調査を受けて学生祭典の見方が変わった。来年参加するときはKSPなどの取り組みにも注目したい」が1名、「変化はなかったが、環境について考えることは重要だと思う」が2名であった。

## 4 総合考察

以上に見られるように、予想されたことであるが、一般参加者も祭典の前後で環境配慮意識・行動の変化が認められるが、KSP実行委員の場合は、特に大きく変化していることがわかった。「KSP実委」ももともと高い環境意識を持っていたわけではなく、最初は興味本位あるいは友人が欲しいと言う理由で祭典実行委員を始めた学生が多いが、「一般」と比較すると「KSP実委」の祭典後の環境配慮意識・行動の変化は顕著であると言える。きっかけは「他大学の友達が欲しかった」等、仲間を求めて始めた活動が、たまたま環境配慮的なものであったという側面がある。このことは、環境問題に関するボランティア活動では親しい友人がいることが参加の魅力になっていることを示した安藤ら<sup>27)</sup>、「木を使ったものづくり活動」への参加のきっかけにも、人とのつながりが少なくなかったという戸田ら<sup>28)</sup>と関連する。また「KSP実委」は祭典当日までに地域との交流型環境配慮事業や他部署への意識啓発活動の企画・運営をおこなうことによって環境問題への関心が高まり、日常生活での環境配慮意識や行動が促進されることに結びついたと考えられる。また今回ヒアリング調査を実施した「一般参加者」は祭典後に環境配慮行動が促進されるという回答は得られなかった。しかし「一般参加者」も環境への今後の取り組みに対しては積極的な姿勢を見せていることが明らかとなった。

学生祭典をきっかけとして、環境配慮意識・行動を高

めることを意図するのであれば、一般参加者を啓発するような取り組みを取り入れることが有効であると思われる。すでにKSPの貴重な経験を有する実行委員会なので、この経験をより広げることによって、大きな成果が得られることが期待される。

### 謝辞

調査に協力いただいた回答者、京都学生祭典実行委員会、大学コンソーシアム京都のみなさまに感謝します。また、本研究の一部にJSPS科学研究費挑戦的萌芽研究(No.23650447)の助成をうけた。

注1 京都学生祭典およびKYO-SENSEプロジェクトの概要

#### (1) 京都学生祭典の概要

学生が人口の約1割を占める「学生のまち」京都で学生プロデュースの祭が京都学生祭典である。大学生と産・公・地域が互いに連携して京都の魅力・学生の魅力を発信し、京都をさらに盛り上げている。全国でも例を見ない「市民祭」である。2003年に始まり、本研究で対象とした第9回は2012年10月7日第11回京都学生祭典が行われ、2015年度は第13回と数えるに至っている(以後「祭典」)。京都学生祭典の企画の一つである「京炎そでふれ! 全国おどりコンテスト」は、全国からエントリーした踊り団体によるもので、2011年には総数875人の踊り手が参加していた。

主催は、第9回京都学生祭典実行委員会(総務部、地域事業部、企画運営部、営業部、広報部、踊り普及部、警備部)であり、共催は、京都学生祭典組織委員会(京都府、京都市、京都商工会議所、一般社団法人京都経済同友会、公益財団法人大学コンソーシアム京都、京都学生祭企画検討委員会代表、京都学生祭典実行委員会代表)であった。

#### (2) KYO-SENSE プロジェクトの概要

祭典の規模が大きくなるにつれ、年々ゴミの量が増加していき、第4回京都学生祭典時には約10トンのゴミが排出された。そこで、「京都学生祭典をより京都で愛される祭にするために、環境にかかる負荷をできるだけ減らしたい」「学生が意識を持って、身近な環境問題に取り組むことで、学生から京都へ、さらには日本全国へ提案できる新しいライフスタイルがある」という想いから、2007年からのリユース食器の導入の取り組みを伸張させ、2008年に「KYO-SENSE プロジェクト」が発足した。

このプロジェクトの発足により、排出されたゴミは第6回京都学生祭典では約1トンまで削減し、第10回京都学生祭典においても、さらなる排出量削減を目指し、日々活動を行ってきた。「KYO-SENSE プロジェクト」発足の同年5月に京都府知事・京都市長らが賛同人とな

る「KYO-SENSE 宣言」を発表し、地域・企業と協力することで活動の基盤を作っている。「KYO-SENSE」の「KYO」の言葉には、京都の「京（きょう）」と今日の「今日（きょう）」の意味と共に、地域の人々と学生との「協（きょう）力」という想いが込められている。

さらに、「SENSE」には今日を生きる若者の「感性」という意味合いがあり、「京都」に古くから伝わる伝統的な知恵と、「今日」の最新技術・知恵を学び、未来を担う私たち学生の「感性」で環境問題に対する新しいライフスタイルを提案しようとすることを表現している。

KYO-SENSE プロジェクトの主な活動は、京都市内におけるクリーンアップと夏の打ち水、京都の企業・行政・学生が出席する環境博覧会「KYO-SENSE 博」である。クリーンアップや打ち水は、梅逕・三条地区の地域住民と交流しながら行った。また、京都学生祭当日は、ゴミの分別活動とリユース食器の回収・洗浄を行った。打ち水に使用する水は、京都市下水道局から2次利用水である下水高度処理水が提供されている。

### 参考文献

- 1) 環境省：気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第5次報告書について、<http://www.env.go.jp/earth/ipcc/5th/>
- 2) 国土交通省：改正省エネルギー法関連情報（住宅・建築物関係）[http://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku\\_house\\_tk4\\_000005.html](http://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk4_000005.html)
- 3) 井上 隆，水谷 傑，田中 俊彦：全国規模アンケートによる住宅内エネルギー消費の実態に関する研究：影響を及ぼす要因に関する分析 その2 日本建築学会環境系論文集，(606)，75-80，2006
- 4) Matsubara, N. and Sawashima, T.: The actual conditions of practicing traditional methods of environmental control and utilization of air conditioners by the residents of detached houses in Kyoto during summer, J. Thermal Biology, 18 (5/6), 577-582, 1993.
- 5) 松原斎樹，宮田希，大山哲司，澤島智明，大和義昭，合掌頭，藏澄美仁，飛田国人：既存住宅における温暖化対策としての昔ながらの暮らし方の見直し，住宅総合研究財団研究論文集，No.36, 317-328, 2009
- 6) 宮田希，松原斎樹，大和義昭，澤島智明，合掌頭，藏澄美仁，飛田国人：夏の涼のとり方に影響する要因の考察 ―西日本4地域における実態調査より―，日本生気象学会雑誌，49 (1)，23-30, 2012
- 7) 松原斎樹，澤島智明：京都市近辺地域における冬期住宅居間の熱環境と居住者の住まい方に関する事例研究 暖房機器使用の特徴と団らん時の起居様式，日本建築学会計画系論文集，No.488, 75-84, 1996
- 8) 松原斎樹，上野涼子，藏澄美仁，大和義昭，松原小夜子：京都市近辺地域における住宅居住者の開放志向，日本生気象学会雑誌，39 (4)，79-92, 2003
- 9) 松原斎樹，合掌頭，藏澄美仁，澤島智明，大和義昭：視覚刺激と聴覚刺激が温熱感覚にもたらす心理的效果，日本生気象学会雑誌，40 (s)，249-259, 2004.
- 10) 松原斎樹，島田理良，合掌頭，藏澄美仁，飛田国人：温熱，視覚，聴覚要因の複合環境評価実験において環境要因を負荷することの影響 ―注意概念による考察―，日本建築学会環境系論文集，611号，83-89, 2007
- 11) 福坂誠，松原斎樹，大和義昭，松原小夜子，戸田都生男：京都市の戸建住宅における夏期の涼しさを得るための行為の実態調査 ―住宅における視覚・聴覚要因等の活用の実態に関する研究―，日本建築学会環境系論文集，79 (696)，133-140, 2014
- 12) 広瀬幸雄：環境配慮行動の規定因，社会心理学研究，10 (1)，44-45 1994
- 13) 三阪和弘：環境教育における心理プロセスモデルの検討，環境教育，13 (1)，3-14, 2003
- 14) 小池敏雄：環境問題に対する心理プロセスと行動に関する基礎考察，水工学論文集，47, 361-366, 2003
- 15) 環境省：環境にやさしいライフスタイル実態調査等 [http://www.env.go.jp/policy/kihon=keikaku/lifestyle/h2303\\_01.html](http://www.env.go.jp/policy/kihon=keikaku/lifestyle/h2303_01.html)
- 16) 原田昌幸ら：地球環境問題に対する住民意識と意識啓発手法に関する研究 第1報―地球環境問題に対する一般住民の意識構造，空気調査・衛生工学会論文集，No.77, 53-64, 2000
- 17) 鈴木宣寛・小場瀬令二：環境配慮行動の行動習慣形成要因に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集 D-1, 161-162, 2008
- 18) 渡部雅之，若松養亮：青年期から成人期に至る環境意識の発達の变化と関連諸要因の効果 発達心理学研究，11 (3)，188-199, 2000,
- 19) 大橋平ら：認知的不協和理論に基づく環境行動に関する基礎研究，沼津工業高等専門学校研究報告，第43号，291-294, 2009
- 20) 松原小夜子，後藤春香：日常生活における20代若者の「もったいない」意識と実際の行動 ―家庭内生活慣習および学校での授業の影響―，人間と生活環境，19 (2)，153-160, 2012
- 21) 松原小夜子：日常生活における「もったいない」意識と実際の行動 ―女親・男親が20代の子に及ぼす影響―，人間と生活環境，20 (2)，111-119, 2013
- 22) 松原小夜子：日常生活における10代若者の「もったいない」意識と実際の行動 ―家庭内生活慣習および学校での授業の影響―，人間と生活環境，20 (2)，155-165, 2013
- 23) 打ち水大作戦本部：打ち水大作戦効果測定データ集，2011 <http://uchimizu.jp/2011/07/data/> 2015/10/01 閲覧

- 24) 小山福栄ら：打ち水による環境意識の変化の考察と最適な打ち水方法に関する研究，日本建築学会大会学術講演梗概集 D-1，681-682，2008
- 25) 大石和人：お祭り・イベントでのごみ減量活動に関する研究 ～参加者と主催者の意識と行動に注目して～ 京都府立大学卒業論文，2004
- 26) 松原斎樹，松原小夜子，烏雲巴根，柴田祥江，白澤ちあき，池田佳奈，石田正浩，森下正修：イベントによる環境配慮意識・行動の促進効果，人間・環境学会誌，16 (1)，16，2013
- 27) 安藤香織，広瀬幸雄：環境ボランティア団体における活動継続意図・積極的活動意図の規定因，社会心理学研究，15 (2)，90-99，1999.
- 28) 戸田都生男，松原斎樹，河合慎介：建築系大学生による森林環境教育の実践効果 ―奈良県川上村の木匠塾「木を使ったものづくり活動」を事例として―，日本建築学会環境系論文集，76 (668)，877-885，2012